

痴呆の都

ちほうみやこ
痴呆の都

はしいろまんぢう

(二十三) 苦惱

ジャン＝ジャックの苦惱は深かった。

移植手術を終えて、帰国してからの最大の望みであつた百恵との別れは、現実のものになつた時、予想もしていなかつた苦しみを彼に与えていた。それはまさに百恵の父洋が死んだ瞬間に託した、ジャン＝ジャックにとつては何よりも重い感情の荷物でもあつた。確かに、あんな事件が起る前に結婚の約束をした百恵に対する感情も眞実であつたが、今のそれは、別れという精神的生命力がマイナス方向に向かう状況下である分、耐え難かつた。

本当にこれでよかつたのか——？

彼は自分の身体を恨んだ。いつそ手術に失敗して死んでいたほうがどれほど楽であつただろうか。しかし死んでいればその後の介護医療の未来に関わる仕事などできなかつたのだ。あの時彼は、けつして死ぬわけにはいかなかつた。

仕事をとるか、家庭をとるか……。

結局、よくある葛藤パターンの枠にはめ込んで、自分の置かれた状況を当てはめて納得しようとするものの、百恵に対する思いは、日を追うごとに深まっていくのだった。

「院長、どうなさいました？最近、顔色がさえませんね」

ジャンⅡジャックは相模咲子が院長室に入って来たことさえ気づかずに、もの思いにふけていた。

「なにがあつたのですか？あの隣の家に引越してから、急に元気がなくなつたよう……」

ジャンⅡジャックは咲子の存在に気がついて、その顔を見つめると静かに笑った。

「どうしました？」

「これからお時間をいただけないかと思ひまして」

咲子は仕事の表情をプライベート用の顔に変えてそう言った。

「食事のお誘いなら仕事が終わってからにしていただけませんか？さあ、持ち場に戻りな

さい」

咲子はふて腐れたように時計を指差した。

「それに私は今日出勤です」

見れば夜の七時を回っている。ジャンⅡジャックは驚いたように、

「ああ、もうこんな時間か……」

とつぶやいた。

「先生、いったいどうしたというんです？このところ、全然私に付き合ってくれないじゃないですか？」

「ごめん、今日はちよっと……」

咲子は機嫌を損ねて机の上に手を置いた。

「前院長の子どもの事ね、大樹とかいう……。先生が前院長とどういご関係だったか知りませんが、前院長の所持品だった家や車をもらって使うのは分かるけど、子どもまで引き取るなんて私には考えられない」

咲子にとっては何気ない言葉が、ジャンⅡジャックにとっては癪にさわった。もつとも自分の本当の正体を知らない彼女にしてみれば不思議がるのは当然のことだとは思ったが。

「君には分かりつこないよ。分かるはずがない——」

ジャンⅡジャックは厳しい真顔でそう言った。

そこに鳴った電話を取れば大樹で、「パパ、お腹が空いたよう」と言う。

「もうじき帰るから何か一緒に食べに行こう。何が食べたい？」

咲子は何も言わず、そのまま院長室を出て行った。

大樹を連れて入ったのは、須坂インター近くのレストラン屋。大樹は久しぶりのラーメンに大喜びだった。そこで二人は味噌ラーメン二つと餃子を一皿注文した。

「大樹はいまの生活に満足かい？」

座敷でテーブルに運ばれたコップの水を飲む大樹の顔を見つめながら、ジャンⅡジャックが聞いた。

「えっ？どういこと？」

「今のような生活が続くけど、いいかいつてこと」

「別にいいよ。だって仕方がないじゃん」

「仕方がないってことは、もっと他の生活を望んでいるのかい？」

「別に……。お姉ちゃんがいればもつといいけど。でも、パパはいやなんですよ？」

ジャンⅡジャックは言葉を詰まらせた。

そこへラーメンが運ばれてきた。ジャンⅡジャックは無意識のうちに唐辛子を振りかけた。

その光景を見つけた大樹は、慌てて彼の手からそれを取り上げた。

「おい、大樹、なにをやるんだい」

「だめだよ、そんなにたくさんかけちゃ。だってお姉ちゃんが言ってたよ。唐辛子は刺激物だから、あまりたくさんかけたら身体に悪いって。特にパパの身体には良くないから、僕が見張つてなきやだめなんだ」

「それも百恵さんが言ったの？」

「お姉ちゃんの手紙に書いてあった……」

大樹はそう言うと、自分のラーメンを食べ始めた。その箸はしの持ち方にジャンⅡジャックは一驚した。

「大樹、ずいぶんとお箸の持ち方が上手じょうずになったなあ。パパが気づかないうちに、お前はどんどん成長しているんだね」

「お姉ちゃんがお箸の持ち方くらいしつかりできないと、大人になってから恥はじをかくつて言つて教えてくれたんだ。おいしいお豆のお料理を作ってくれてね、ぼく、それが食べたかったから毎日練習したんだよ」

「またお姉ちゃんか……」

ジャンⅡジャックは苦笑した。大樹が生まれて七、八年の間、仕事の片手間に必死に子育て

てをしてきたつもりだったが、実は何も教えてあげてなかったことに今更いまさらのように気が付いた。それを百恵は、自分が留守のわずか一年にも満たない間に、食事のマナーに至る細かなところまで躰しづけているのである。ジャンⅡジャックはとてつもなく大きなものを失ってしまったような絶望感にとらわれた。

「ほかに百恵さんから教わったことは？」

大樹は首を傾げた。

「別に何も教わってないよ。ただ、毎日いっしょにいただけ……」

「一緒にいただけか……」

ジャンⅡジャックは「大樹にはやはり百恵さんのような母親が必要なのか」と思いながら、ラーメンを口に運んだ。

苦悩は続いた――。

ある日は西園が院長室にやってきてこう言った。

「コスモス園の特養棟の診察当番に、院長を組み込んでほしいとお話ですが……」

実は、百恵とは少し距離を置いて大切に見守ると洋に誓ったあの日、ジャンⅡジャックは

西園に、自分を特別養護棟の診察当番に組み込むように話していたのだ。ところが他の用事が重なって、過去数回の当番は、いずれも西園が換わりに行っていたのである。

「院長はお忙しいようなので、やはりはずしておいた方が良いでしょう」と

ジャンⅡジャックは暫く考え込んだ。

「何があつたか存じませんが、百恵さんとは既に離婚したことですし、ご心配なのは分かりますが、あまり気をかけなくとも……」

「彼女の様子はどうですか？」

「院長……」

西園は浩幸らしからぬ眼の潤みようを見て言葉を失った。

「離婚して暫くはため息ばかり落としている様子でしたが、最近はふつきたのでしょうか、富に明るく振舞う姿が目につきます」

ジャンⅡジャックは「そうですか」と言っただけ、何も言わなかった。

「やはり愛しているのですね。幼い頃から院長を知っている私には分かっていますよ。どうして離婚なんて……。院長には奥さんが必要なんですよ。まだ遅くありません。よりを戻されたら……」

「西園さんまで僕を苦しめる……」

ジャンⅡジャックは時間を見計らうと、水といっしょに免疫抑制剤を飲み込んだ。その光景を気の毒そうに眺めながら西園は言った。

「院長は、ご自分の身体では彼女を幸せにできないとも思われているのでしょうか。しかし、私は思うのですが、幸せというものは人に与えたり、与えられたりするものじゃないでしょう。幸せは、あくまで自分自身で築いていくものだと思いますがね。そんなふうに思われたら、彼女もきつと迷惑でしょう」

西園は大兵な身体からは似つかわしくない言葉を吐くと、照れたように頭を掻いた。

「西園さんは知っているでしょう、心臓にあるシナプスの話を——」

ジャンⅡジャックはそう言うと、突然人が変わったように語りだした。

「ほら、また僕の中にジャンⅡジャックが顕れてきた——。こうなると、もう、僕にも止められない。僕は以前、こんなに涙もろくなかった。こんなにお喋りでもなかった。そしてこんなに一人の女性を愛せる人間でもなかった！こうして感情が高鳴ると、僕は山口浩幸の理性を失って、完全にジャンⅡジャックになってしまうのさ。僕は山口浩幸でもなく、ジャンⅡジャックでもない。もう、百恵さんが愛した男はどこにもいないんだ！それに拒絶反応

が起こって、いつ死——」

「院長!!」

西園の大声が狭い院長室に鳴り響いた。その気迫には、どんなにお喋りな人間の勢いあま
る言葉の弾丸をも食い止める力があつた。一瞬室内がシンと静まり返つた。

「あなたは山口浩幸ですよ！」

西園の言葉は確信に満ちていた。どんな嘘でも信じ込ませる勢いと重みがあつた。

「あなたは私から師事する山口正夫先生のたつた一人の御曹司、山口浩幸院長ですよ！
さもなければ、あなたはこんなに苦しめない。私はこんな小さな頃からあなたを知っている。

間違いない。あなたは山口浩幸ですよ！」

西園はジャン・ジャックの身体を覆うように抱きしめた。

「ジャン・ジャック・デユマさんは院長の命の恩人なのです。いいじゃないですか、院長
の命の中に、少しくらい恩人の居場所を作つてあげたつて……。彼だつて、院長の中で生き
続けることを、きつと喜んでるに違いありません」

正気に戻つたジャン・ジャックは、やがて西園から離れた。

「もう少し楽に生きましょう——」。これは先代ではなく、院長が私に教えてくれたこと

ですよ」

西園は太った豊満ほうまんな顔に、満面の笑みを浮かべた。それに応えて、やがてジャンⅡジャツクの表情にも笑みが戻った。

「ところでどうしましょうか、診察当番の件は？」

ジャンⅡジャツクは少し考えた後、

「ご迷惑をおかけすると思いますが、やはり組み込んでおいてください。週一は無理だと思うなら月一でもかまいません。僕はやっぱり百恵さんを近くで見守っていたい……」

それは洋が託した最後の願いとは関係のないところで顕れた本心だった。西園は、
「わかりました」

と、一言いうと、やがて院長室を出て行った。